

学びをつなぎ、行政機関の看護職者として 放射線に向き合う

Facing the nuclear disaster in Fukushima as a nurse working in ministry

山口 拓允

Takumi YAMAGUCHI

環境省大臣官房環境保健部放射線健康管理担当参事官室

Office of Director for Radiation Health Management,
Environmental Health Department, Ministry of the Environment

長崎に生まれ育った者の使命は、「原爆被爆者の思いを語り継ぐこと」であると私は考える。さらに、殊、われわれ看護職は、自らも被爆しながら看護を行い続けた、久松シソノ長崎大学名誉校友をはじめとする先輩諸氏の思いを受け継ぎ、後世につなげる使命があると思っている。

昨今、医療現場において放射線はなくてはならない存在になり、放射線看護の知識や技術は極めて重要となった。また、2011年に発生した東京電力(株)福島第一原子力発電所事故により、放射線の医用利用における看護のみならず、被ばく医療分野における看護も重要視され、緊急被ばく医療、リスクコミュニケーションの知識や技術が看護職において重要であることも明らかになった。

私は、「災害・被ばく医療科学共同専攻」で、基礎放射線医科学、放射線防護学、被ばく影響学、リスクコミュニケーション学等、必要な知識を身につけることができたと共に、福島県川内村においてICRP副委員長であるJacques Lochard教授や留学生と実習を行い、地域住民との対話を通して、共考し、協働することの重要性を学ぶことができた。また、ウラジオストクで開催された日露学生フォーラムへ参加し、「日露間における災害・被ばく医療分野における協働」について言及し、日露首脳にその提言書を手渡すことができた。

このような経験を踏まえ、私は現在、環境省にて放射線健康不安対策に従事している。今なお福島県内には、帰還困難区域が存在し、混乱した生活を送っている住民が数多く存在している。また、ふるさとに帰還したものの、放射線に対する不安を抱えている住民がいることも事実である。帰還した住民が、「ふるさとに戻ってきて良かった」と思える支援が極めて重要であると考え。さらに、放射線看護人材の育成支援や、若年層への放射線教育の支援も行い、放射線リスクリテラシー向上のための支援を今後も継続して行っていきたいと考えている。

長崎で生まれ育ち、長崎の地で放射線を学んだ看護職である私は、原爆投下直後から、被爆者に対する医療支援を行い続けた永井隆博士が残した、「如己愛人」の精神のもと、「他人事ではなく自分事として」福島と関わり続け、微力でも復興に寄与したい。